京都大学医療技術短期大学部紀要別冊
健康人間学　第9号　1997

対人関係を深める
—体験学習の有効性—

谷垣　静子，上野加寿子，小田　真子

Deepening Our Understanding of Interpersonal Relations
—The Effectiveness of Experiential Learning—

Shizuko TANIGAKI, Kazuko UENO, Shinko ODA

Abstruct: This study was designed to explore the effectiveness of experiential learning the understanding of personal relations. This study was conducted from April, 1995 to July, 1996. The subjects were 149 students in the 3rd grade of the College of Medical Technology, Kyoto University. In this each student played a role as a patient with triple handicaps and as a nurse. After playing a role as a nurse, students were asked to report the details how supported the "patients".

Data were analyzed with use of Krippendorff's "content analysis". The results of this analysis revealed that students learned the needs that the nurses gave the patients.

Thgough this study, students could recognize the importance of active relationship between patients and nurses.

Key words: Interpersonal relations, Nursing process, Needs

はじめに

他者を理解する上で大切なことはどんなことであろうか。まずは相手に自分の心が向いていなければ始まらない。関心がないと理解も深まりはしない。その上で「関わりを通して」相互に他者を理解できるようになる。このようなことは講義で「伝える」ことは出来るが，本当にそうだという理解にはなかなかつながらない。そこで，3回生の演習の中で「他者理解を深める」をテーマに演習を行っている。ある援助行為を行う中で，他者に影響を与えながらも，自分も他者に影響を受けていることを学ぶと同時に，その中で相手の反応に応じつつ，必要な援助を思考し，実践し，評価することを目的に行っている演習である。この演習を通して得られた学習の有効性について検討を試みたので報告する。

研究方法

1）研究対象：本短期大学学生
　平成7年度3回生（78名）と平成8年度3回生（71名）合計149名
2）期間：平成7年4月から平成8年7月
3）演習方法：表1に示した
4）分析の方法
　(1) 学生間で話した内容（ふたり一組になって話し合った内容の記録）を取り上げクリッペンドルフの内容分析法[1]を参考に3点（相互作用の視点・心模様の記述・援助

京都大学医療技術短期大学部
Division of the Science of Nursing, College of Medical Technology, Kyoto University
1996年11月30日受付

表1　演習方法

※二人ペアになり、患者役と援助役を決める。患者は話せない，聞こえない，見えないという三重苦がある設定にする。
※ある援助行為（水で薬を飲む）を援助役にだけ説明をする。
※実演する。
※役割を交代する。援助行為（食事援助）を援助役にだけ説明する。
※各自で援助状況の記述①を行う（真実にそった記述とする）。
※二人でお互いの感想を出し合う（記録する）。
※二人で話しあった内容を発表しあい，さまざまな気づきを共有する。
※話し合いの後
- 援助状況の記述①をもとに，情報②を集める
- 各自が看護上の問題③を考える。
- そのゴール④を決める。
- どんな解決をすればよかったかを考えて，計画⑤を立てる。
- 再度同じ人とペアを組み，計画したものを実施してみる。
- そして，評価⑥する。

をする上で重要と思ったことや感じたこと）から分析する

(2) 問題解決過程の中から，他者理解に関して分析する

結　　果

1）学生の反応（頻度の高かった反応）

◆　援助役になった学生は戸惑った表情で，周囲の状況を探っている。

◆　薬を患者役の耳の近くで振ってみたり，臭いをかがせたり，コップをもたせて口まで近づけたりしている。

◆　そのうち数人が指文字を使って，内容を伝えようとする。背中に書くもの，手のひらに書くもの，大腿部に書くものといろいろである。

◆　患者役は，なんだか訳が分からない様子で，最初はくすくす笑っている。

◆　そのうち，患者役はどうすればいいのといいたげに，空中に手をあげて困った様子である。

◆　「本当に飲むの…格好だけ？」といわんばかりに，首をかしげている。それでも勧められるままに飲んでいる。気味悪げにゆっくりと口に入れている。

◆　患者役が自分の思うようにしてくれないと，援助役の行動が止まっている。どうしようとあたりを伺い，困った様子である。

2）分析（1）の結果：表2示した

3）A学生の看護援助の記述と計画：表3に示した

考　　察

分析（1）の結果から

演習では，三重苦なために相手のニーズが言語的コミュニケーションでは把握しにくい状況を設定している。非言語的コミュニケーションによって関わることでしか「情報」はとらえらることはできない。関わることで相手のニーズを推し量り，必要な援助を導きだし，実施されていると考える。「相手が不安そうにしていたら，自分の行為がこれでいいのだろうかと不安になった」とあるが，相手の反応が自分の行った援助行動を振り返ることになっているのである。学生自身は気づいていないが，相手の影響を受けての自らの反応なのである。患者の反応はまさに自分の心の反映にあるといえるだろう。このような相互の反応が短時間の間に数回となく繰り返され，不安を軽減させるための援助が行われているのである。

臨地実習では，これまでに学習してきた「知」と「わざ」を、統合した援助行為として

表2　学生が記述したものを分析

内　容　分　析
相互作用の視点 ◇患者役は受け身的であった。 ◇一方的に進められていたように感じた。 ◇指文字は理解出来たが，文章が長くなるとわかりにくい。 ◇手の動きで相手の心理状態がわかる。 ◇援助者が焦っている様子がうかがえた。 ◇患者の表情から患者理解が少し出来たように思う。 ◇患者が困っているときは動きが止まることがわかった。 ◇手を空中に持ち上げているときには，何をするのかわからずと惑っていることだとわかった。
心　模　様 ◇援助役になったときには不安に感じている者が多かった。 ◇その不安の内容としては，自分の伝えたことが相手に伝わっているかどうかということや，相手が不安な様子を見せると自分の援助のあり方がこれでいいのだろうか・勝手な判断をしているのではないかと不安に陥った。 ◇押しつけになっているのではないか。 ◇説明よりも行動が先になっているように思った。
援助をする上で重要と思ったこと ◇患者と援助者の関係はとても大切であると感じた。 ◇否定的な気持ちになると，次の行動に移ろうとするときに拒否されるように感じた。 ◇相手の気持ちが分からないと，どうすればいいのか迷ってしまうことから相手を知ることはとても大切だと感じた。 ◇患者が理解したかどうかを確認しながら援助方法を考えることが重要だとわかった。

表3　A学生の看護援助の記述と計画

◆援助状況の記述①―抜粋―

視覚での理解が不可能であるから，触覚を使って理解してもらおうとしたが，くすりを薬と理解するにはなかなかできなかった。そこで薬を手に握らせて口元まで持っていったが，相手は自分の方を向いて首をかしげた。手に握ったものが何かわからないので，口に持っていくことでさらに分からなくなったようだ。そこで，水の入った紙コップを両手で握らせて口に運んだ。薬を握らせ，口に持っていき，紙コップを口元まで持っていく行為を何度かするうちに相手は不安に思いながらも，薬を口に入れて，水を飲んだ。

◆看護上の問題③「薬と水であることが理解できないために戸惑っている」

◆ゴール④「薬と水を理解した上で薬の内服が出来る」

表現することが出来るかどうか試される。実習前に受け身的な教育を受けてきた学生が，どうすればいいのだろうと相手の状況をつかみながら援助行為を行う演習の意義は大きいと考える。しかし，「知」だけでも「わざ」だけでも患者にとって有効な活用となるのは難しい。相手の困っていることにどれほど近づけるかで，個別的な援助方法が生じると思うからである。

相手に安心感をもたせることは，確実な知識と技術を通して可能となるが，そこに「心」が入っていなければ，心地よいものとはならないであろうし，感じる心がないところに適切ケアも見いだせないと考える。特に三重苦のように話せない，聞こえない，見えない時には，そこで相手に何が起こっているのかを感じとる能力が必要である。つまり，人への援助を職業とする私たちにとっては，知的な枠組みをふまえながらも，その枠組みに制約されることなく，むしろ「感じる」ということに視点を移す必要があるのではないだろうか。

分析（2）の視点から

A学生が考えた問題解決の思考を振り返り，患者と看護者の間に「看護」が成立していく過程を考えてみる。

まず，看護上の問題を抽出するには，どれだけ真実に近い情報を，幅広く，深く取り上げているかである。その次に情報をどう統合させ，分析するかが問われるだろう。

表3に示した学生①記述から，患者は薬という理解もないままに，不安に思いながら内服している様子が伺える。患者の様子と看護者の感じ・考えたことを記述することで，自分の行った看護を振り返ることが出来る。最初，A学生は触覚と日常的な一般動作で「くすり」ということが理解できると思ったが，それが難しいと気づいた後，水の入ったコップをもたせればわかると考えたのである。しかし，それでも理解している様子はない。この記述を読み返し，A学生は何が問題であったのかを考え，看護計画を立案した。A学生が立てた計画は指文字が理解可能な人であれば，指文字を使って「くすり」を理解してもらおうと考えたのである。指文字を活用し，同時に触覚と臭覚で理解を深めようと考えたのである。

初めての関わりでは，どの学生も「くすり」を飲ませることばかりに気持ちが先走っている。相手がどのような状況にあるのかという配慮がない。どのような薬なのか事前に話はしてあるが，患者に説明をした者は少なかった。また，患者から質問があった者も少なかった。患者と看護者の間に共通の目的を持って行うことが重要と言いながらも，共通のものになっていた者は少なかった。患者は受け身であると日頃感じているにも関わらず，「くすり」を飲ませなければならないという，看護者の一方的な行為になっていたということにも気づいている。A学生もその様な反省にたって，情報を統合し，分析したのである。よってゴールも「薬と水を理解した上で薬の内服が出来る」となっている。

患者と看護婦との関係が成立するには，看護上のニードを満たすという暗黙の条件があると考える。その条件なしに，関係は成立しないのである。患者と同じ時間と場を共有する中で生じてくる関係性は，あるニードを満たすことで進展し，さらに深まっていくのである。ニードの充足をどのように行うかが看護の力の見せ所である。

ウィーデンバックは「臨床看護の本質」の中で，『臨床看護実践はある目的を目指して行われるものである。また深い思慮をもって行われるものであり，かつ患者中心のものである。この3つの特性，すなわち目的性，思慮の深さ，患者中心こそは，臨床看護にってかくことの出来ない独特のものである。』[2] と述べている。患者中心の看護といいながら，実際は看護者の行為が先走りになり，その目的も共有のものにならないままに，看護が実践されていることがある。しかし，思慮深く，看護行為を振り返ることで，新たな看護の展開が始まり関係もつくられていくと考える。

私たちの看護実践は，常に，謙虚に，客観的に日々の看護を振り返り行われるべきものである。

ま　と　め

平成7年度，平成8年度3回生の演習の有効性を検討した。

①援助を通して相手を推し量る訓練がされたものと考える。

②関わること，そして振り返ることで患者と看護者の「看護」上の関係は深まっていくことを実感してもらえたものと考える。
③受け身的な教育を受けてきた学生にとって，能動的な行動がとれたものと考える。

おわりに

対人援助を職業とする私たちにとって，いま相手との間に何が起こっているかを感じる能力は何にもまして重要なことである。そのためには，まず，相手のことを知りたいと思う「心」と，同時に，人間についての理解や専門的な「知」「わざ」についての熟知と洞察が必要である。

相手が真に必要としている看護上のニーズは，関わることで相手の真実の姿を理解しつつ，見つけだされるものと考える。そして，関わることを通して，自分自身を知ることにもなるのである。

文　献

1) クラウス・クリッペンドルフ：メッセージ分析の技法（訳三上俊治，椎野信雄，橋元良明）．東京：勁草書房，1992年第2刷
2) アーネスティン・ウィーデンバック：臨床看護の本質―患者援助の技術（訳外口玉子，池田明子）．東京：現代社，1985第2版